九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

周作人と冰心 : 早期冰心女士と我が祖父の往来

周, 吉宜
中国現代文学館 : 元・副館長

中里見, 敬
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1959061

出版情報：言語文化論究. 41, pp.79-95, 2018-10-22. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

周 作 人 と 冰 心

――早期冰心女士と我が祖父の往来――

周 吉 宜 著*

中里見 敬 訳

訳者解説

本論文は、2018年２月６日に九州大学伊都キャンパス新中央図書館で開催された第１回「東アジアの交流と文学」国際シンポジウム「『春水』手稿と日中の文学交流 ── 周作人、冰心、濱一衛」において基調講演として発表され、同時に同シンポジウム論文集に収録されたものである（シンポジウム論文集は、九州大学学術情報リポジトリにて公開）。その後、本論文の中国語版「冰心与我祖父周作人的早期交往」が『中国現代文学研究叢刊』2018年第４期（総第225期）に掲載されたものの、著者の同意を経ずに臆改した個所があるという。本訳稿は著者の中国語原文に基づき、一切改変を加えていない。

燕京大学の学生であった冰心（1900～1999）に対して、文学革命・新文化運動のリーダーである北京大学教授・周作人（1885～1967）はその才能を認め、とくに『春水』を含む初期の小詩を高く評価した。しかし、周作人は戦時中の日本との深い関係により、漢奸として断罪される。一方、冰心は国民党やアメリカ・日本の大学からのオファーを断り、社会学者・人類学者の夫・呉文藻とともに日本から香港経由で帰国し、中国作家協会の幹部として新中国の文壇で活躍した。こうして戦後、二人の明暗は分かれることとなった。そのため冰心は「周作人との交友について沈黙を守らざるを得ない時代が長く続いた」（小川利康「小詩運動の周辺 ── 周作人と謝冰心」同上シンポジウム論文集所収）のである。

周吉宜先生の本論文は、日記や書簡といった一次史料を用いて、周作人と冰心の知られざる交流を丹念に描くものである。大部分の史料が今回初めて公開されるものであり、それによって二人の精神的な深い結びつきが明らかになったことは、文学史研究上、大きな反響を呼ぶことは間違いない。周吉宜先生によれば、冰心だけでなく多くの若い学生や作家に対して、周作人は惜しみない援助を与えていたことが家蔵の書簡からわかるという。本論文は、周作人の真の為人を知るうえで貴重であるだけでなく、書簡を用いた研究の可能性を示す点でも意義深い成果だといえよう。（中里見 記）

* 中国現代文学館 元・副館長

前言

『中国現代文学研究叢刊』2016年11期に発表された「周作人1939年日記」を手がかりとして、2017年に九州大学の中里見敬教授が同大学附属図書館濱文庫において中国の著名作家・謝婉瑩（冰心）女士の前世紀二十年代の詩稿 ──『春水』手稿を発見したことは、中日両国で関係者の注目を集めた。

九州大学附属図書館の濱文庫は、同大学教授・濱一衛先生が生前に収集した文献資料を収蔵するために設立された。濱一衛先生は若い時期、中国に来て勉強・研究を行い、周作人先生と交流があった。周作人先生が1939年に贈った冰心女士の『春水』手稿を、彼は長年自宅で珍蔵していた。

『春水』手稿の発見により、「濱一衛と周作人の関係」、「冰心と周作人の関係」、「『春水』と周作人の関係」に注目が集まるようになった。これらの問題は、従来関連する史料がほとんどなかった。筆者は近年来、周作人先生が残した歴史資料の整理に従事している。筆者の知る限り、周作人先生の日記中に関連する記載があるほか、収蔵する書簡の中には濱一衛先生、冰心女士、および他の関連する人々からの来信も含まれており、上述の問題を研究するうえで依拠すべき資料だといえる[訳注1]。

周作人先生は1917年、北京大学に着任してまもなく北京に居を定めた。受け取った手紙はすべて自宅で保管していた。1966年８月、中国で「文化大革命」が始まると、「破四旧」〔旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣の４つを打倒する運動〕と「抄家」〔家財没収〕の災禍の中で、これらの手紙は周作人先生の他の財産とともに、「紅衛兵」の破壊、略奪、「収蔵」に遭い、すべて失われ行方不明となった。10年後、中国で「文化大革命」の正当性が否定されると、周作人先生の子孫による長期にわたる捜索を経て、1988年に遺失物のごく一部が返還された。その中には周作人先生が保管していた手紙が含まれていた。筆者と家族がこれらの手紙を整理する過程で、返還されたのは周作人先生の所有する書簡の一部にすぎず、多数が失われていること、また封筒から便箋が抜き出され、付箋の貼られた紙袋に入れられた手紙が少数あること、「封筒はあるが手紙のないもの」、「手紙はあるが封筒のないもの」、さらに散乱、破損、汚損、カビ、虫食いも多数あることがわかった。そうした中で、冰心からの来信の状況は良好な方であった。（図１参照）

現在、整理作業はなお継続中で、未調査の手紙が多く残されている。そこで、本稿は周作人先生と冰心女士および『春水』の関係をめぐって、現在までに知りえた日記と書簡を収集・整理し、学術研究に裨益することを願うものである。

本稿で引用する周作人先生の日記は、1931年と1939年の二年分のみ原本に依拠し、それ以外はすべて大象出版社の影印版『周作人日記』による。書簡の引用はすべて周作人先生所蔵の書簡原本に基づく。

行文の便宜と紙幅節約のため、本文においては尊称を用いない。影印版『周作人日記』と周作人先生所蔵の書簡からの引用に際しては、改めて説明と出処の注記は行わない。

図１　冰心の書簡

1．冰心の米国ウェズリー女子大学入学以前（1922～1923）

周作人の日記において、「冰心」の文字が最初に現れるのは1922年５月の記録である。

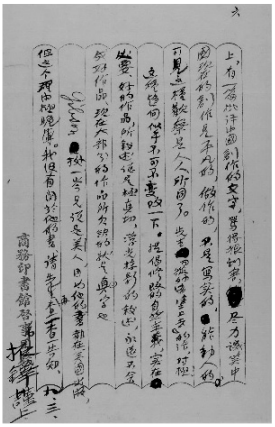
1922年５月25日「……下午为《北京周报》译冰心小说未了……」〔午後、『北京週報』のために冰心の小説を訳すも終わらず。〕

1922年５月26日「……上午译小说了，寄丸山[1] 函及件[2]。」〔午前、小説を訳了。丸山に手紙と原稿を送る。〕

1922年春、日本の新聞に、冰心の小説「愛的実現」について記者の書いた不当な見解が掲載された。周作人はそれを知ると、相手が中国語を十分理解していないためだと考え、「愛的実現」を日本語に翻訳し、中国の日本語紙『北京週報』に発表して誤解を正そうとした。上の日記の記載は、まさにこのことを記したものである。

その後、周作人はさらに「关于〈爱的实现〉的翻译」〔「愛の実現」の翻訳について〕という文章を書き、８月28日の『晨報副鐫』に発表し、その日本人記者が「把《爱的实现》看作自由恋爱的礼赞，特别加以讥笑」[3]〔『愛の実現』を自由恋愛の礼讃と見なして、嘲笑した〕のは、「是他自己不懂中国语的缘故」[4]〔彼自身が中国語を理解していないためだ〕と明確に指摘した。明らかに、周作人は自らの中日文壇における名声を利用して、駆け出しの新人冰心を守ろうとしたのである。

実は、冰心への意見は国外からだけではなかった。1921年９月３日、鄭振鐸は周作人宛の書簡で次のようにいう。「冰心太纤巧，太造作，在《晨报》上的浪漫谈，更显出雕斲的斧痕，远不如她初作的动人。日人某君，在《读卖新闻》上，有一篇批评中国创作的文字，骂得狠利害，尽力讥笑中国现在的创作是平凡的，做作的，不是写实的，能动人的。可见这种观察是人人所同了。」〔冰心はあまりにも繊細で、わざとらしい。『晨報』でのロマンティックなお話は、文章を飾り立てた痕跡が目立って、初期の感動的な作品に遠く及ばない。日本人の某君が『読売新聞』に中国の創作を批評した文章を発表して手厳しくけなし、現在中国で書かれている作品は平凡、思わせぶりであって、写実的、感動的なものはないと痛烈に嘲笑している。こうした見方が人々に共有されていることがわかる。〕（図２参照）当時、鄭振鐸は上海にいたため、彼がこの手紙を書いた際、五日前に北京の『晨報副鐫』に掲載された周作人の「关于〈爱的实现〉的翻译」を読んでいなかったであろうと筆者は推測する。魯迅の９月13日付け周作人宛書簡においても[5]、別のことについてではあるが、「如此断断，殊可笑，与女人因被调戏而上吊正无异，诚哉如柏拉图所言，『不完全则宁无』也」〔この怒り方はまったく滑稽だ。女性が弄ばれて首を吊るのと違いはない。実に（イプセンの劇で）プラトンが言ったとおりだ。「完全でないならば、むしろない方がよい」〕と冰心のことを述べている。（図３参照）当時の文芸界において、冰心は明らかに皆から庇護を受ける苗木ではなかった。周作人がこの一文を中国紙上で発表することを選択したのには、おそら



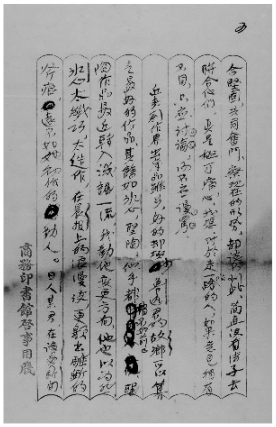


図２　鄭振鐸書簡

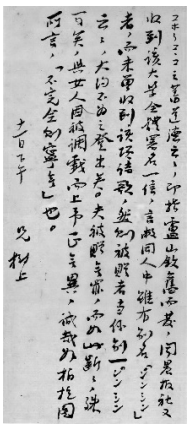


図３　魯迅書簡

く相当に深い意味があったのだろう。

1923年６月７日の周作人日記に再び「冰心」が現れる。「上午往燕大讲演，闻冰心病，呕血。」〔午前、燕京大学へ行き講演する。冰心が病気で吐血したと聞く。〕当時、冰心は燕京大学の学生であり、この２ヶ月後に留学のため渡米した。出発するまで、「吐血」の原因はわからないままだった。

現存資料によると、周作人は1898年、13才のときに日記を書き始めて以来、その書き方には何度か変遷があった。例えば、1902年４月11日（壬寅３月４日）に新しい日記帳を使い始めたとき、周作人は最初のページに「日记不厌详尽，有得即书，庶备观睐」〔日記はなるべく詳しく記す。学んだこと感じたことはすべて記録しておき、将来調べるときのために残しておく〕、「毎日坿杂记，一切悉载之，不嫌琐俚」〔毎日雑記を付し、すべてのことを記し、煩瑣を厭わない〕と記し、さっそくこのとおりに実行している。1903年９月（癸卯の年）頃には、「紀事体」で日記を書くことに変更し、毎日記すことをやめて、「不得涉于琐碎及简略」〔詳細すぎるのも、簡略すぎるのもよくない〕という。その後また、略記の時期や、毎日記す時期があったりしたが、1918年に上京し北京大学教授になってからは、字を惜しむこと金の如しというように、きわめて少ない文字で毎日略記するのを常とするようになった。そのため一般には十分重要と見なされる出来事の多くが日記には書き記されなかった。筆者の考えでは、まさにそれ故、これ以後の日記に記された一字一句は、すべて注目に値する。そのため、周作人が1923年６月７日に「闻冰心病，呕血」〔冰心が病気で吐血したと聞く〕の六文字を日記に記したことは、彼の冰心に対する格別の関心と重視を表すものだと考えられるのである。

1923年７月４日の周作人日記に「得冰心函」〔冰心より来信〕との記載があるが、筆者が整理した書簡の中に、この手紙は見つかっていない。周作人日記にも返信の記載はない。

７月末、冰心はアメリカ留学の前に、周作人の家を訪れて別れの挨拶をし、周家の子供たちと記念写真を撮った。それから上海の実家に帰って留学の荷造りをした。

1923年７月31日の周作人日記に、「……下午谢女士来访……」〔午後謝女士が来る〕とある。

1923年８月５日、冰心は上海の実家に帰り、８月15日には周作人へ手紙を書いて、別れてからの状況を次のように報告した。５日に無事帰省し、すべては「很平安的，只是困顿一些。」〔順調ですが、多少疲れました。〕実家に着いてからは「闭门不出，一切的欢送会都没有去赴，除了燕大同学的饯别会以外。」〔外出を控え、歓送会もすべてお断りしています。燕京大学学生の送別会以外は。〕今日我々は現代医学の常識に照らして、この手紙と先の周作人日記から、冰心はすでに肺結核を患っていたと知ることができる。だが当時の人々は、冰心本人を含めて、誰にもわからなかったのである。冰心は手紙といっしょに、北京での別れ際に周家の子供たちと撮った写真２枚を送っている。冰心は書簡の中で次のようにいう。「相片照得总算不错，师弟妹的笑容，非常可爱，谨赠一份，以为去国的纪念。」〔写真はなかなかよく撮れています。先生のお子さんたちの笑顔がとても可愛らしいので、お贈りして出国の記念とさせていただきます。〕最後に８月17日に出発すること、今後も先生からのお便りを楽しみにしていますといったことが書かれている。「后天就放洋了，我极关心中国文学界和燕大消息，闲时万望不吝教诲。再见！ 学生谢婉莹 十五晨」〔明後日には出航です。私は中国の文学界と燕大の消息を知りたいと強く願っています。お暇の折にどうかご教示下さいますようお願い申し上げます。さようなら！ 学生謝婉瑩 15日朝。〕

1923年８月17日、冰心は船で上海を出航し、日本経由でアメリカへ向かった。

８月18日、周作人は冰心の15日付け書信を受け取り、日記に「……得……谢女士函又小孩照片二枚……」〔謝女士の手紙と子供の写真２枚を受け取る〕と記した。

筆者は孫伏園[6]から周作人宛の1923年８月３日付け書簡を見出した。その封筒の背面に次のように

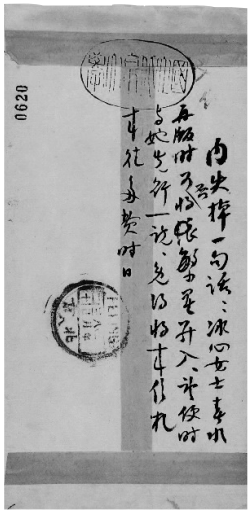


図４　孫伏園書簡

記されている。「内失掉一句话：冰心女士《春水》再版时可否将《繁星》并入，望便时与她先行一说，免得将来信札来往多费时日。」〔中にひと言書き忘れました。冰心女士の『春水』を再版するときに、『繁星』とまとめて１冊にしてよいか、ご都合のよいときに彼女に聞いていただけませんか。今後手紙のやりとりに時間がかかるようになるでしょうから。〕（図４参照）

1923年８月10日の周作人日記を調べると、「寄冰心函」〔冰心に手紙を出す〕とある。これは記録に残る、周作人が冰心に宛てた最初の手紙である。以下に述べるように、周作人は『繁星』と『春水』とまとめて１冊にしたいという孫伏園の提案を、間に立って伝達している。しかし、その手紙はおそらく17日の出航まぎわに冰心の手元に届いたらしく、出発前の慌ただしさの中で冰心は開封する暇もなく、船が港を出てからようやく落ち着いて手紙を読んだようである。

８月19日、冰心は船上で周作人に手紙をしたためた。冒頭に「在船上奉读手示是如何的喜悦」〔船上でお手紙を拝読するとは、なんとうれしいことでしょう〕という「手示」〔お手紙〕は、周作人の10日付け書簡にほかならない。

手紙の中で冰心は出航後の高揚する気持ちを記している。「三天的航海增加我无限愉快，风浪平静，终日与海相对……现在已是船慢慢驶入花和光的国的日本，先生久知其美，我不多说，我这支笔形容不出来。」〔三日間の航海で限りない喜びはいや増すばかりです。波は穏やかで、終日海と向き合っています……いま船はすでに花と光の国日本へゆっくりと進みつつあります。先生はその美しさをよくご存知ですので、私があれこれ言うのは控えます。私のペンではとても表現できません。〕続いて、『春水』再版に対する考えを次のように述べている。「《繁星》并入《春水》，我自己无问题，但不知文学研究会能否应许，但《晨报》上的杂诗（？）[7] 我想若和他们要，或能成功，总之我是无意见的。」〔『繁星』を『春水』とまとめて１冊にすること、私自身は問題ありません。しかし文学研究会が許可するかどうか、『晨報』に掲載した雑詩を（？）彼らに下さいと頼んだら、あるいはうまくいくかもしれません。いずれにせよ、私は賛成です。〕〔訳者補：詩集『繁星』の転載は、出版元の文学研究会が許可しないかもしれないので、単行本になる前の初出の新聞連載から転載するよう『晨報』に頼んでみてはどうかと提案している。〕

冰心は手紙の中でさらに次のようにいう。「《春水》代理人，拟讬刘放园先生，先生认得他么？」〔『春水』の代理人は、劉放園先生に委託したいと思います。先生は彼をご存知でしょうか。〕劉放園は冰心の母親のいとこの息子で、1919年より『晨報』の編輯を務めていた。冰心の最初の文学作品「二十一日聴審的感想」は、劉放園が『晨報』編輯在任時に『晨報副刊』に掲載された。おそらく冰心はこうした関係から、『晨報』に発表した雑詩を取り戻すのであれば、「あるいはうまくいくかもしれない」と手紙に書いたのであろう。筆者の知る限り、周作人は日記の中で劉放園について触れたことはなく、書簡の中にも彼からの来信はなく、周作人が劉放園を「ご存知で」あったかどうかは確認できない。

冰心のこの書簡の便箋と封筒には、いずれもアメリカ東洋航路および船舶のカラー写真と文字が印刷されており、便箋の周囲には北京の天壇祈年殿、石獅子、清朝の馬褂を着た人物がカラーで印刷されている。この手紙は８月20日に日本の神戸で出され、同月24日に北京に到着していることが、消印からわかる。

1923年８月24日の周作人日記に、「得冰心神户函」〔神戸から冰心の来信あり〕とある。

２．冰心のアメリカ留学期間（1923～1926）

冰心は米国到着後、志望どおりにウェルズリー女子大学で英文学の修士課程に入学した。しかし、まもなく結核に罹患していることがわかり、休学して隔離治療を受けるよう命じられた。

大学を離れて山の中での隔離治療に赴く前々日、すなわち1923年12月13日に、冰心は周作人から手紙を受け取る。しかしこの書簡について、周作人日記には記載がない。翌日、冰心は返信する。「周师：昨日得来谕，不胜欣感。京中各大学，雨打风吹，只有燕大比较的有生意了。《周刊》看了两期，很好，总可见出同学们的努力。国内文学界之沉寂，不自今年始，我希望这沉寂是为将来绝叫之准备，否则就太可悲哀了！── ‘沉默的自由’有绝对的必要。我以为作家原是当取‘天马行空’的态度的。是不是？」〔周先生：昨日は来信を拝受し、喜びに堪えません。北京の各大学が「風雨にさらされている」（厳しい試練に遭っている）中で、燕京大学だけが比較的生気があるのですね。『週刊』２冊を読みました。すばらしいです。同学たちが頑張っていることがわかります。国内の文学界が沈滞しているのは、今年に始まったことではありません。この沈滞が将来の絶叫に向けた準備であることを願います。さもなければあまりにも悲しすぎます！──「沈黙の自由」は絶対に必要です。作家は本来、「天馬空を行く」（自由闊達で躍動感に満ちている）という態度であるべきだと私は思います。そうではありませんか。〕自分のことについて、冰心は次のように書いている。「明天就须离此冒雪入山了。为着养病，大约要休息半年，这是怎样突然而不幸的事！」〔明日、この地を離れて、雪の中、山へ入らねばなりません。病気療養のためで、約半年休養せねばなりません。なんと突然の不幸でしょう！〕冰心は前向きで楽観的であった。自分を励まし、他人を慰め、自身の「突然の不幸」を先生に報告するときも、相手に心配をかけまいとして、次のように続ける。「然而以看书，深思，和娱乐自然为日课，却是从来未有过的。我静中往往能写作，户外幕天席地的生活，更能辅助我 ── 我想造物者对于我的遭遇，都是经过深深的思索的！我只是一张白纸，他轻描淡写的替我逐渐添上酸楚和快乐的叶片和花瓣，我希望到他完工的时节，是一幅很凄美的图画。」〔けれども、読書、思索、娯楽がおのずと日課になります。これまでになかったことです。静かな中でときには物書きもできるでしょうし、戸外の粗末な生活もさらに私を助けるでしょう ── 造物主が私に与えた仕打ちは、すべて深い考えがあってのことだと思います！ 私は一枚の白紙であり、造物主が私のために一つ一つ苦しみと楽しみの葉っぱと花びらを描き足してゆきます。それが完成したとき、一枚の美しい絵画となっていることを希望します。〕孤独の身で異国の地にあって、自分の先生に手紙を書くとき、その行間にやるせなさと悲哀が漂うことはやむをえない。

手紙の中で冰心はさらに、1923年に周作人と魯迅が新しく出版した文集が届いたこと、また自分で考えていた授業の計画についても報告している。「《自己的园地》和《呐喊》曾由《晨报》社寄来，海外得此，加倍喜欢。曾想译《阿Q正传》作我的文课之一，因病中止，很可惜的。」〔『自己的園地』と『吶喊』が晨報社から送られてきました。海外で受け取り、うれしさは倍加します。『阿Q正伝』の翻訳を私の作文の授業の一つにしようと思っていましたが、病気のために中止したことは大変残念です。〕そのあとさらに、燕大校長ジョン・レイトン・スチュアートなどについても触れている。

困難な境遇にあって、憂愁と寂寞は覆い隠しがたい。冰心は手紙の末尾で次のようにいう。「今日下雪，湖上雪景极好，我明天走了，信是慰冰纯洁的饯筵，且予我以她被雪的真像，但忽忆起北京的雪，‘城墙杨柳’，很惆怅的。请师母夫人安。学生谢婉莹 十二月十四日。」〔今日は雪です。湖上の雪景色は実に美しいです。私が明日出発するので、きっと慰冰（ワバン湖、冰心を慰める湖）が純潔のはなむけとして、雪に覆われた彼女の真の姿を私に見せてくれたのでしょう。しかし、ふと北京の雪、「城壁の楊柳」を思い出し、悲しみがつのります。先生の奥様によろしくお伝えください。学

生謝婉瑩 12月14日。〕最後に山中での隔離療養中に手紙を受け取るための住所が記されている。書信中の「慰冰」とは、冰心がウェルズリー大学にある湖につけた中国語の訳名であり、英語の元の名は Lake Waban である。「師母夫人」とは周信子[8]のことであり、その後しばしば冰心の挨拶の中に見られる。

1924年1月21日、周作人はこの書簡を受け取り、日記に記した。「……得凌、谢二女士函……」〔凌、謝二女士から来信。〕

当時、中米間の普通郵便は1ヶ月で届いたが、この手紙はやや遅れている。封筒と消印から、この書信が1月13日に燕京大学に到着していることがわかる。おそらく冬休みであったために、燕大に数日間取り置かれた後に周作人の家に転送されたのであろう。

周作人がすぐに返信の筆を執ったことは、以下の冰心からの来信によってわかるが、日記には記していない。

1ヶ月後の1924年2月23日、冰心は周作人に書簡を送っている。その中で、周作人からの返信を受け取ったことに触れている。「周师：来谕拜读，敬悉……」〔周先生：貴函を拝読いたしました。〕

この書信において、冰心は再び『春水』編集の問題に触れている。「《春水》再版时，将杂诗加入一节，我自无异议．惜此间亦无全稿．如能由新潮社辑成寄下最妙。」〔『春水』再版時に雑詩を加えること、私には異存ありません。ただこちらには原稿がそろっていませんので、新潮社の方で取りまとめてお送りいただければ幸いです。〕自分の病気と心情について、冰心は次のようにいう。「迩来日有起色，青山雪景佳绝」〔近頃日々快復の兆しあり、山の雪景色は絶景です。〕日常生活と勉強について冰心は、文章を書いたり、読書したりして過ごしていること、しかし中国の本は「詩詞経典」しか読めず、外国の本も「短詩と小説」に限定されていることを報告している。「太使思想集中的书籍」〔思考を集中させる書籍〕は医者に読むことを禁止されていたからである。

冰心は手紙の中で、国内の文芸界の状況に関心があり、新しく出版された雑誌を読みたいという希望を周作人に述べている。「如能赐寄一二尤感。」〔もし一、二お送りいただければ幸甚に存じます。〕書簡中には、さらに在米の「燕大同学会」の状況、スチュアート校長のこと、『燕大週刊』に投稿したい旨などについても触れている。書簡の末尾では、やはり苦境を訴えずにはいられない。「朔风大竞，手冻不能握管，享受自然之中，只是写字未免苦些。」〔北風が吹きすさび、凍えた手ではペンも握れません。自然を楽しむ生活の中では、字を書くことすら苦痛なのです。〕

封筒に押された北京の消印は1924年3月27日で、周作人は同日この手紙を受け取り、日記に記している。「……得……谢女士函……」〔謝女士より来信あり。〕

筆者は書簡を整理する中で、冰心と『春水』について書かれた一枚の便箋を見つけた。孫伏園からの来信の末頁であり、その前の便箋および封筒は所在不明である。（図5参照）

書簡末尾に孫伏園は次のように補筆している。「冰心女士《春水》拟再版，乞便中去函一问下半部稿何时可以寄来，费神。」〔冰心女士の『春水』は再版の予定です。後半の原稿はいつ送ってもらえるか、ご都合のよいときに手紙で尋ねていただけないでしょうか。お手数をおかけします。〕

この書簡の落款の日付は3月18日となっている。何年のものであるかについて、便箋と孫伏園の職歴、および冰心の状況から見て、1924年であろうと筆者は推定している。

この書簡および上述したことからわかるように、冰心はアメリカ留学中、「《春水》代理人，拟讬刘放园先生」〔『春水』の代理人は、劉放園先

図5　孫伏園書簡

生に委託したい〕としていたにもかかわらず、実は周作人が国内で冰心のために出版社と連絡を取り、出版に関する打ち合わせをしていたのである。

冰心は1923年の冬から肺結核のために休学し、単身アメリカの山中で隔離治療を受けた。一人の若い女学生の辛苦、孤独、寂寞、そして思うにまかせない創作と原稿の整理、これらは想像するに余りある。一方、周作人は当時、冰心と国内出版社の橋渡し役を務め、出版実務の処理を手助けしていた。冰心にとっておそらく、それは出版の便宜を得たということ以上の意味があったであろう。その後の冰心の来信からわかるのは、周作人はずっと彼女と手紙のやりとりを続け、彼女のために出版を計画し、原稿を取りまとめ、書籍雑誌を郵送し、彼女の精神的な支えであり続けた、ということだ。祖国と家族から遠く離れ、しかも重い病を患うという困難な時期にあった冰心にとって、文学・出版の事業面と精神面の両方において、周作人から心のこもった思いやりと援助を得ていたと言うことができるだろう。

1924年8月23日の周作人日記に「……下午寄冰心函……」〔午後、冰心に手紙を出す〕との記載がある。

1924年9月9日、冰心は周作人が送ってきた原稿の写し若干を受け取った。それは『春水』再版にむけて周作人が冰心のために集めた詩稿であった。その日のうちに、冰心は周作人に返信している。「周师：一夏漫游，以致寄来的抄稿，也随着递转了几个地方，今天才收到……」〔周先生：夏の間あちこち漫遊していたため、お送りいただいた原稿の写しも、何ヶ所か転送されて、本日ようやく拝受いたしました。〕

『春水』再版に関して、冰心は自分の考えを持っており、この手紙の中で周作人の編集方針および送られてきた詩稿に対して異なる意見を述べている。おそらく先生を理解し信頼しているからであろう、冰心の書きぶりは率直である。「卷中的那些，若是经过先生的选择，我没有一点异议。若是有遗漏，我就愿添上我处所有、卷中所没有的。」〔巻中の詩篇は、もし先生の選択を経ているのであれば、私としてはまったく異議ありません。もし遺漏があるとしたら、私の手元にあって、巻中に入っていないものを加えたいと思います。〕「《一朵白蔷薇》和《冰神》，是用散文的格式写的。这类的小文字还多，如《石像》《山中杂感》等等，都在《晨报》上登过，抄时太长，我想这类东西，附在《春水》后，未免喧宾夺主——《问答词》等都长得很——不如等以后有别的机会再说，先生以为如何？」〔「一朵白薔薇」と「冰神」は、散文形式で書いたものです。この類の小さな作品はまだいくつもあります。例えば「石像」、「山中雑感」などで、いずれも『晨報』に掲載されたものです。書き写すには長すぎます。この種の作品は、『春水』の後に付すと主客転倒になりかねず——「問答詞」などはとても長いです——別の機会に回したほうがよいように思います。先生のお考えはいかがでしょうか。〕

書簡の末尾に、遥か万里の彼方で先生が払われた苦労に対して、冰心は謝意を表している。「一切费神，十分感谢。」〔一切のご苦労に、心より感謝いたします。〕先生の家族に対しても挨拶を述べている。「谨问师母及合第安吉 学生谢婉莹上 九、九、一九二四」〔先生の奥様とご家族の皆様の平安を祈念申し上げます。学生謝婉瑩 1924年9月9日。〕この書簡は封筒が失われており、周作人日記にも記載がない。

半年余りの治療休養を経て、冰心は健康を回復し、9月末には学校に戻り勉学を再開した。

1924年9月23日、冰心は周作人に手紙を書いた。「周师：来书谨收入……」〔周先生：来書、謹んで拝受しました。〕時間の前後から見て、この「書」とは上述した8月23日付けの周作人から冰心宛書簡であるはずだ。

冰心はこの書簡において周作人に次のようにいう。「诗稿……已又寄回，当已入览。」〔詩稿は……

すでに返送いたしました。すでにご覧になられたことでしょう。」続いて弟・冰仲が来信で「《通讯》出版事」〔『通訊』出版の事〕に言及していることを述べ、「我无有什么不可，只是错字很多，每信又多是匆匆写成，抄好后最好也能赐寄」〔いけないこともありませんが、あまりにも誤字が多く、一通一通がほとんど匆々のうちに書きあげたものですので、書き写した後にお送りいただきたく存じます〕と書いている。後の文章からわかるように、『通訊』とは『児童通訊』〔訳注：『寄小読者』（小さき読者へ）を指す〕のことである。冰心は周作人が書き写した原稿を送ってもらい、それから自分で整理、修正することを望んでいた。もしかすると上海方言を加えるかもしれないともいっている。「或者要添上海言。」〔あるいは上海語を加えるかもしれません。〕そのために出版の時期が遅れることに対して、「甚以为歉！」〔大変申し訳ありません！〕という。手紙の中で冰心は先生の心遣いに返信し、近況を「甚佳」〔とてもよく〕、「承问谨谢」〔お気遣いに感謝いたします〕と報告している。

手紙の終わりでは自身の感懐を述べている。ウェルズリー大学の文学科に「我尤为满意」〔私は大変満足しています。〕加えて、学校の風景のすばらしく、「一切环境均使我快乐，苟非有时起乡愁，似乎一时不想归去」〔環境のすべてが私を楽しい気分にさせます。たまにホームシックになることさえなければ、すぐには帰りたくないほどです〕という。さらに、周作人が中心となって発刊した雑誌『駱駝』を読みたいこと、文学に関する論文を『燕大週刊』に投稿、翻訳したいことなどを記し、努力したくても「忙病相妨」〔多忙と病気〕、そして「功夫不足」〔時間が足りない〕ため、思うに任せないことを嘆いている。

書簡の中で、冰心は周作人に中国国内の状況についての考えを述べている。「中国文学界，思想界一切现状可以从报纸上见到一斑，不过这于我很漠然，我素来是不关心这些事的，似乎这些‘界’中人也没有关心的价值！」〔中国の文学界、思想界の現状については新聞でその一端を見ております。しかし、それは私にとって漠然としたものです。私はもともとそうしたことには関心がなく、そうした「界」の人たちは関心を払うに値しないように思います。〕さらに軍閥戦争の混乱の中にある国家と同胞について次のようにいう。「真使我悬挂，北京之安危，我尤在念。希望大家都未曾受什么惊恐。问师母大人安！ 学生谢婉莹 九月廿三日」〔私は心配でしかたありません。北京の安否をとりわけ気にかけています。皆さんが恐ろしい目に遭っていないことを切に希望します。先生の奥様によろしくお伝えください。学生謝婉瑩　9月23日。〕

この手紙は、冰心がある人に託して中国へ持ち帰ってもらったものであり、10月21日に北京で投函されている。封筒に「瑩自美缄，发自本京东城」〔瑩がアメリカで封をして、北京東城にて投函〕の文字が書かれている。この手紙と、これより先に冰心が郵送した詩稿について、周作人はいずれも受領後、日記に記録している。

1924年10月９日の周作人日記に「……得谢女士函、件[9]……」〔謝女士から手紙と詩稿を受け取る〕とある。

1924年10月22日には「……得谢女士函」〔謝女士より来信〕とある。

周作人の1924年11月の日記からわかることは、彼は友人と相談して『語絲』の誌名と出版日を決定し、創刊号が出版されるや、ただちに冰心に２冊送っていることだ。

1924年11月２日の周作人日記に、「下午……议刊小周刊事，定名曰语丝，大约十七日出版……」〔午後……週刊雑誌刊行のことを話し合う。誌名を『語絲』とし、17日頃出版の予定。〕

1924年11月23日「……寄冰心函，语丝二份。」〔冰心に手紙と『語絲』２部を送る。〕

1924年11月26日「……寄冰心函。」〔冰心に手紙を出す。〕

1925年１月16日、冰心は周作人に手紙を書き、書信と『語絲』を受け取ったこと、およびそれに対する感謝を述べている。手紙に次のようにいう。「周师：假后回校，捧读来谕。《语丝》亦已收入，

甚感。」〔周先生：冬休みが終わり学校へ戻り、貴翰を拝読いたしました。また『語絲』も拝受、感謝に堪えません。〕

おそらく周作人が書簡の中で、『語絲』創刊を謙遜して「鼓噪」〔鳴り物入りで登場する〕といったために、冰心は返信において国内の出版界が「沉寂」〔沈滞している〕ことに不満の意を示し、「鼓噪一番，当然有益」〔鳴り物入りで登場して騒がすことは、きっとよいことにちがいありません〕と書いている。冰心は自分の創作について、「承索文字，如有写作，自当寄奉，不过上课后忙得很，想在去国时代尽量吸收，又因儆于去年之病，总不敢多作课外事务，《儿童通讯》也搁置了半年，想起觉得惭愧！」〔文章ご依頼の件、承知しました。書けましたら、お送り申し上げます。しかし、授業後も大変忙しくしております。思えば、出国するときにはなるべく多くを吸収しようと考えていましたが、去年の病気を戒めとして、授業以外のことは控えぎみにしております。『児童通訊』も半年間放置しており、思い出すと慚愧に堪えません。〕さらに周作人に対して、自分の健康状態は「近况尚佳」〔最近良好〕で、生活と学習の環境も「清美得很」〔非常に清潔できれい〕であり、在米の燕京大学卒業生と「常见面」〔しばしば会っている〕、けれども「功课上却有望洋之叹，……」〔授業では力不足を嘆いています〕と記している。続いて「北京如何？燕校如何？均以为念」〔北京はいかがですか。燕大はいかがですか。気にかけております〕と立て続けに質問し、最後は例によって「师母大人前统此叩安！ 学生谢婉莹 一月十六日」〔先生の奥様に叩首してご平安をお祈りします。学生謝婉瑩 1月16日〕と締めくくっている。冰心は徐々に健康を回復し、精神的にも充実してきたことが見て取れる。

この手紙の封筒に押されたウェルズリーの消印は1925年1月17日、北京の消印は2月18日だが、周作人日記に記載はない。

アメリカ留学中の冰心が、先生である周作人のために骨を折ったこともある。それは周作人のためにアメリカでギリシャ語版『イソップ寓話』を入手しようとしたことである。このことは前述の冰心1月16日付け周作人宛書簡に見える。「希腊文《伊索寓言》，书店回信说很难找，我仍请他们尽力。」〔ギリシャ語の『イソップ寓話』は、書店の返信によると入手困難とのことですが、引き続き書店にお願いしてみます。〕その後の結果がどうであったかについては、拠るべき資料がない。

3．冰心の留学帰国後（1926～1939）

冰心は1926年の夏にアメリカでの学業を終えると、すぐに帰国した。おそらく多忙のため、周作人に会いに行くことはなく、11月17日になって周作人に手紙を書いてお詫びの意を伝えている。「周先生：归后未曾拜见，抱歉得很。」〔周先生：帰国後、ご挨拶にも伺わず、大変申し訳ありません。〕続いて、周作人を晩餐に招待している。冰心は特別に一晩休める部屋まで用意した。もし散会が遅くなったときは、周作人が夜道を帰宅する不便のないようにとの計らいである。手紙には「拟于十一月廿九（拜一）晚七时半，请先生晚餐……并已为先生预备住处……」〔11月29日月曜の夜7時半、晩餐にお越し下さい。……すでに先生のために泊まれるところも準備してあります〕とあり、さらに梁啓超らも宴席に招待していることを伝えて、周作人の「赏光」〔ご来駕〕を希望しますと書かれている。おそらく約束の日程がやや先だからであろう、書信中に晩餐の会場は記されておらず、先生にお越しいただけるなら、会場は改めて通知するとだけ書いてある。

この手紙には切手もなく、住所も書かれていない。使いに直接届けさせたか、あるいは誰かに託したのであろう。この手紙と晩餐のことは、周作人日記に記録されていない。

冰心と呉文藻の結婚式は、1929年に燕京大学で行われた。周作人はお祝いの品を贈り、日記に記

した。

1929年6月12日「上午往燕大……送谢女士结婚礼二品，下午三时半回家……」〔午前、燕大に行く。……謝女士に結婚のお祝い2品を贈り、午後3時半帰宅。〕

以下の冰心の手紙によると、婚礼後、冰心は上海で母親の入院に付き添って看護した。その間、周作人は冰心のために北平女子文理学院国文系の職を用意し、9月に各大学の新学期が始まることを手紙で知らせた（この手紙については、冰心の来信中に言及があるものの、周作人日記には記載がない）。上海の病院で重病の母親を看護していた冰心は、そこを離れられない状況にあった。それまで勤めていた燕京大学の仕事を放棄せざるをえなくなったため、冰心は女子文理学院の機会はどうしても確保したいと考えた。

9月10日、冰心は周作人に手紙を書いた。「周先生：来示敬悉。承嘱在北平女大[10]国文系帮忙，自当遵命」〔周先生：お手紙拝受いたしました。お申し越しの北平女大国文系の職の件、命に従うべきところ〕、「家慈托病，颇甚危急，现由莹陪住上海宝隆医院，北上暂时无期。」〔母の病が重篤で、現在私が上海の宝隆病院で付き添っております。上京の時期は暫時未定です。〕冰心は学校の新学期に間に合わないことを心配して、融通をきかせてほしいと望んでいる。手紙で周作人に、もし北京に着くのが「至早或在九月底」〔早くても9月末〕だとしても、女子大の仕事は「能不耽搁否？——燕大方面亦恐不能应对矣」〔差し支えないでしょうか——燕大の方はおそらく無理でしょうね〕と尋ね、さらに女子大の住所や待遇を問い合わせている。書簡の末尾は「甚感。敬请 道安。师母大人前问好。学生谢婉莹拜启 九月十日晨宝隆医院」〔感謝します。どうぞお大事に。先生の奥様によろしくお伝えください。学生謝婉瑩　敬具　9月10日朝　宝隆病院にて〕と結ばれる。

周作人は9月13日にこの手紙を受け取ると、翌日には「速達」で返信し、冰心のために手はずを整えてやった。

周作人日記の1929年9月13日に「受信：……冰心……」〔冰心より来信〕とある。

1929年9月14日に「发信：……冰心……」〔冰心へ返信〕とある。

冰心が北平へ行って教えることについて、夫の呉文藻は意見を異にしていた。1929年9月21日、呉文藻は北平で周作人宛に手紙を出している。まず「刻接婉莹自沪来函，嘱将伊致 周先生一信代转，兹特专函奉上」〔先刻、上海の婉瑩から手紙が来ました。彼女の周先生宛書信を転送するよう頼まれたので、ここにお送り申し上げます〕と記した後、自分の考えを述べている。冰心は貧血があるため「真正静养半年或一年……」〔半年か一年は静養に努める〕べきである。最後に、「素稔 先生体贴学生，十分周到，用敢冒昧直陈个中真情，深望 先生再予婉莹以考虑之机会，则万幸矣」〔先生の学生に対する周到な思いやりについては日頃より詳しく存じております。不躾にも私の考えを直言申し上げました。先生にはどうか婉瑩に再考の機会を賜りますれば、幸甚に存じます〕という。ところが、同封されていた冰心の手紙には、周作人が整えた手はずに満足する意が記されていた。「周师：得快信，敬悉，课程承定为习作三小时，极好……」〔周先生：速達を拝受、拝誦いたしました。作文の授業を3時間とのこと、承知しました。好都合です。〕さらに、女子大での授業の時間数が自身の休息にちょうどよく、燕大の教職を辞するつもりであることを述べている。自分の体調について、冰心は手紙の中で「在沪医生说，我似有贫血病，教读不能过三数钟点……」〔上海の医者が言うには、私には貧血があるようで、授業や読書は3時間を超えないように〕と言っている。続いて冰心は母親の病気について「似见好转」〔好転の兆しがあるようです〕と報告し、母と一緒に病院で中秋節を迎えたことを記している。「今天是旧历中秋，我陪她在院过节，我们已有六年功夫不在一块过中秋了，床上放个炕几，自己热一菜，自己洗盏，怡然对酌，觉得怪有意思的。」〔今日は旧暦の中秋です。私は母と病院でこの日を過ごしています。6年間も一緒に中秋節をお祝いしていなかっ

たので、ベッドの上に小さなテーブルを置き、自分で料理を一皿とお酒も用意し、心穏やかに杯を酌み交わしました。なかなか乙なものでした。〕落款に「谢婉莹拜启 中秋节」〔謝婉瑩 敬具 中秋節〕とある。1929年の中秋節は９月17日であった。

それから約１ヶ月後、周作人日記の1929年10月15日に、「午至南大地吴文藻君处，冰心招午餐」〔昼、南大地の呉文藻君宅へ行く。冰心が午餐に招いてくれた〕とある。

1929年11月14日の日記に、「午冰心邀去便饭，地山[11]亦来，下午四时后回家。」〔昼、冰心に誘われて食事。許地山も来る。午後４時過ぎ帰宅。〕

── 冰心は結局、北平女子大で教えることになった。

その後の状況から見て、呉文藻の心配は理由のないことではなかった。虚弱体質で病気がちの冰心は、女子大の授業を完全にやり遂げることは困難で、ときには周作人に代理をお願いすることさえあった。

1930年７月７日、周作人は冰心に一通の手紙を出した。その日の日記に、「发信：冰心」〔冰心に手紙を出す〕とある。

1930年７月14日、冰心は周作人に返信した。「周师：卧病月余，近始稍愈。女大学生试卷，尚未收齐，能为代催否？」〔周先生：一月あまり病気で伏していましたが、ようやく回復してきました。女子大の学生の試験答案がまだ届いていません。催促していただけないでしょうか。〕「回顾去年成绩，惭感交蒙，近来病躯益见不支，秋季恐不任驱遣也。」〔去年の成果を思い返すと、慚愧に堪えません。最近はますます病気がちで、秋には授業の任に堪えなくなるのではないかと心配です。〕大学で教える機会を得ることが貴重であることは、冰心もよく知っており、今後も教職に留まることを強く望んでいた。「承嘱明秋仍服务女大。」〔来秋も女子大で働けること承知いたしました。〕「万一明年……顽躯增健，政局无变，先生仍需要人帮忙者，当再效劳……。」〔もし来年……体が元気になり、政局に変わりなく、先生の方でもお手伝いする人が必要なときには、また何卒よろしくお願い申し上げます。〕書簡の末尾に、「文藻奔父丧回藉尚未有信来。师母前代候。谢婉莹七月十四日」〔文藻は父親の葬式で故郷に戻ったまま、いまだ便りもありません。先生の奥様によろしくお伝えください。謝婉瑩　７月14日〕とある。

周作人はこの手紙を1930年７月14日当日に受け取り、日記に記している。「受信：冰心」〔冰心より来信。〕

1930年の年初には、冰心の母親が亡くなっていた。その後、冰心は病に伏し、学校の仕事も周作人に代理を頼まねばならなくなった。同年半ばには夫・呉文藻の父親も亡くなり、この年の後半は明らかに授業を担当することは困難であった。この一年は、冰心にとってまたもや試練の年となったのである。

周作人の日記には、冰心に関する以下の記録が見られる。しかし、筆者はそれらに対応する書簡や他の資料を見出していない。

1931年９月９日「发信：冰心，受信：冰心……」[12]〔冰心に返信。冰心より来信。〕

1931年９月16日「……受信：冰心……」[13]〔冰心より来信。〕

1933年12月６日「……午餐约冰心夫妇、振铎[14]及张君……」〔冰心夫妻、鄭振鐸、張君と午餐。〕

1933年12月30日「……下午三时往访冰心夫妇……」〔午後３時、冰心夫妻を訪問。〕

1934年１月６日「……下午……至二院参加国文学会，冰心、振铎二君谈话。六时至东兴楼宴会，来者谢、吴、郑、马、陈、杨、梁、朱、徐、刘、马等十二人，九时返。」〔午後……二院に行き国文学会に参加し、冰心、鄭振鐸の二君と話す。６時から東興楼で宴会。来たのは、謝、呉、鄭、馬、陳、楊、梁、朱、徐、劉、馬ら12名、９時に帰宅。〕

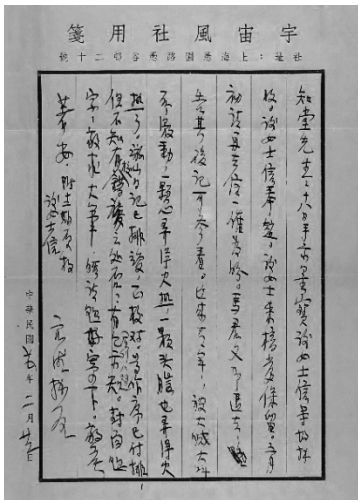

宇宙風社用箋

図６　陶亢徳書簡

陶亢徳[15]からの周作人宛の来信に冰心のことが書かれている。落款の日付は1936年２月22日である。（図６参照）

陶亢徳は手紙の中で次のようにいう。「知堂先生：十八日手示墨宝、谢女士信等均拝收。谢女士信奉赵。谢女士来稿当保留。三月初请再去信一催为盼……」〔知堂先生：18日の直筆の墨宝、謝女士の手紙などすべて拝受いたしました。謝女士の手紙は返却いたします。謝女士の原稿は保管しておきましょう。３月初めにもう一度手紙で催促していただければ幸いです。〕末尾の補注に「附十二期原稿、谢女士信」〔第12期の原稿と謝女士の手紙を同封します〕とある。

封筒の中には、「谢婉莹 二月十七夜」〔謝婉瑩　２月17日夜〕の落款がある周作人宛書簡が同封されていた。冰心は手紙の中で次のようにいう。「豈明师：手示拜读，《宇宙风》写稿事，谨奉命。」〔豈明先生：お手紙拝見いたしました。『宇宙風』へ寄稿の件、お引き受けいたします。〕続けて、しかしいまは家に泊まっている外国の友人の接待で忙しいため、３月初めに客が帰ってから「当即写寄。」〔すぐに書いてお送りします。〕冰心はさらに「已有多年写作不抄稿了，能保存原稿倒是好办法」〔もう何年ものあいだ作品の写しを作っていません。原稿を保存できるのであれば、なかなかいい方法ですね〕と書いている。

この二通の手紙の日付と内容から以下のことがわかる。まず周作人が冰心に手紙を書き、冰心の返信を受け取ったあとで、周作人は陶亢徳に宛てて手紙を書き、受け取ったばかりの冰心からの返信を同封して陶亢徳に送った。陶亢徳は読み終わると、返信とともに冰心の手紙を周作人に送り返した。すでに刊行された周作人の原稿も同時に返送した。

明らかなことは、周作人が冰心と陶亢徳に宛てた手紙の中で、『宇宙風』への投稿の件に触れただけでなく、冰心の原稿を保管すべきだと提案したことである。冰心宛の手紙では、投稿した原稿を手元に取っておくようにと、自らの考えを説き、陶亢徳に対しては、冰心の原稿は刊行後も保管しておき、捨てないようにと要求している。そこで陶亢徳は返信の中で、「完璧归赵」〔訳者補：『史記』藺相如伝から、預かったものを損なうことなく持ち主に返すの意〕の比喩を使って、冰心の手紙を返却した。同時に冰心の原稿を保管することに同意し、周作人の意見を尊重する態度を示したのである。

通常、新聞や雑誌は不採用の原稿は作者に返却するが、採用し刊行された原稿は、返却することも、保管することもしないのが慣例であって、発表後そのまま原稿を保管するのは特別待遇といえる。筆者の考えでは、周作人が陶亢徳に冰心の原稿を保管するように提案したのは、冰心を重んじ、刊行物を大事にする態度の表れであって、冰心と雑誌および文学界に対して有益なことであった。当時の冰心がどのような考えであったか、我々は知る由もない。彼女の手紙は無邪気に締めくくられている。「近来很懒，又萧飒，自己的努力，还须前辈来催，真是太羞愧了。敬覆。并请 双安 谢婉莹拜 二月十七夜」〔このところ怠けがちで、やる気も起きません。私がなんとか努力しているのは、先生方の催促のおかげです。慚愧に堪えません。拝復　先生と奥様の平安を祈念して　謝婉瑩拝　２月17日夜。〕

1936年の冰心は、それまでの苦境から脱して、生活が軌道に乗ったことが明らかである。周作人宛の書簡にも、「師でもあり友でもある」がゆえの率直さと気儘さがいっそう加わっている。

1936年４月30日、陶亢徳からの来信を受け取った冰心は、その日のうちに周作人に手紙を書いて報告している。「周师：今天也得陶先生来信，嘱写《宇宙风》“北平特刊”的文章。这题目很好，已回信答应了，特报告一声。」〔周先生：今日、陶先生より来信があり、『宇宙風』「北平特刊」への文章を依頼されました。このテーマが気に入ったので、お引き受けすると返信しました。先生にご報告いたします。〕さらに熱心な招待も行っている。「城外您似乎应当常来走走，朋友虽然不多，学生总还有。什么时候来，请打电话说一声，我们这里可以歇歇力，粗茶便饭倒还方便，郊外春意到底浓多了。」〔先生どうか北京城外にもときどきお越し下さい。友人は多くないかもしれませんが、いつも学生がいます。お越しになるときは、いつでも電話をください。うちは泊まることもできますし、粗茶とありあわせの食事でよろしければ便利なものです。郊外はすっかり春めいてまいりました。〕

1936年の周作人日記は社会動乱の中で失われてしまい、来信および送信の状況は不明である。

1939年、周作人が書斎を整理していると、1922年の冰心『春水』の手稿が出てきた。製本装丁したうえで、かつて留学していた日本人学者・濱一衛に贈った。このことは、周作人が日記に記している。

1939年10月５日の周作人日記に、「……下午又整理旧报。得春水原稿，拟订以赠滨君」[16]〔……午後、また古新聞を整理する。『春水』の原稿が出てきたので、装丁して濱君に贈る〕とある。

1939年10月８日に、「发信：滨件[17]……」[18]〔濱に原稿を送付〕とある。

周作人の所蔵した書簡の中には、濱一衛からの来信が含まれている。そのうち1939年11月２日付けの書簡に、『春水』手稿のことが記されている。濱一衛は手紙の中で次のように書いている。「今度は冰心女士の『春水』の原稿本を下さって有難うございます。……何にしても貴重な品を頂戴してお礼の申し様も有りません。私の書斎に貴重本が一冊出来た訳で迚も嬉しう御座います。」[19] 訳注２

中里見敬の論文によると、この手稿の冒頭に周作人自身による題記があるという。「此冰心女士的诗集《春水》原稿，今秋整理书斋于故纸堆中觅得，转眼已十八年矣。特为装订寄赠 滨一卫君 知堂記 中华民国廿八年十月七日在北平。」[20]〔この冰心女士の詩集『春水』の原稿は、今秋書斎を整理していて、故紙の山の中から見つけたものである。またたく間に18年が過ぎてしまった。特に装丁して濱一衛君に贈る。知堂記す。中華民国28年10月７日北平にて。〕

４．結　語

1936年４月30日の冰心からの来信が、現在知りうる最後の一通である。

1928、1936、1937、1944、1946、1947、1948年の周作人日記はいずれも失われているため、本稿ではこの年の日記を参照していない。

現存する1939年以降の周作人の日記中に、冰心に関する記録は見えない。

現存史料からわかるのは、歴史上、周作人は冰心の成長に対して深い思いやりと庇護を与え、多大な援助と支持の手をさしのべたことである。周作人は冰心および『春水』と密接な関係があり、周作人が当時、冰心を高く評価し、期待していたことは想像に難くない。

筆者から見ると、冰心が周作人の「学生」「弟子」であったかどうかはさして重要ではない。彼（彼女）ら自身がそのことに対してどのように考えていたかも重要ではない。「周作人研究」と「冰心研究」は、いずれもさらに深く展開する価値のある研究テーマである。

現存する日記、書簡などの歴史資料から、周作人の援助を得たのは冰心一人だけでなく、また廃名、江紹原、俞平伯、沈啓无にとどまらないこともわかる。青年学生および各方面の人士から様々な時期に送られてきた多数の書簡を、筆者は目にしてきた。そこから周作人が彼らに対して多様な

援助を与えていたことがわかる。例えば、1949年以前には李金発、汪静之、林庚、潘垂統、凌叔華、謝冰瑩，楚図南、鄭徳音、李大釗の家人ら、1949年以降は顧紹康、黄萍蓀、陶冶公、周冠五、鍾叔河、馮元亮、龍榆生、徐淦、鄭子瑜などがおり、これ以上列挙しない。

それ以外に、周作人の子孫は大量の日本語書簡を保存している。そのうちの大部分は日本各界の人士が書いたもので、少数ながら中国・朝鮮の人士が書いたものもある。現在のところ整理・発表にまで至ったのはごくわずかにすぎない。中日両国の人民は長い友好の歴史を有するが、このたび『春水』手稿が改めて両国の文化交流と人民の友好交流を想起させたことは、称賛に値する。より多くの人々が「周作人と冰心」、「周作人と濱一衛」、「周作人と松枝茂夫」、「周作人と安藤更生」に注目し、そこから日本語で周作人と交流した人々への関心、彼らと周作人による書簡往来への関心が高まることを願っている。その結果として、これらの書簡が早期に整理・発表され、学術研究、国際間の文化交流、および人民友好の促進に寄与することを切に希望する。

最後に、『春水』手稿を発見した九州大学の中里見敬先生に対して謹んで感謝したい。また本稿に支持と援助を賜った陶亢徳先生のご息女・陶潔女史、日本の弘前学院大学の顧偉良先生、中国人民大学の李今女史に感謝申し上げる。

2017年11月19日撰稿于北京
2018年８月４日改稿于北京

注

1 『北京週報』の日本人記者、丸山幸一郎。別名は丸山昏迷。周作人の友人。
2 「件」は、周作人日記における原稿の略称。ここでは周作人が訳した「愛的実現」の日本語訳稿を指す。
3 周作人著「関於『愛的実現』的翻訳」,『周作人散文全集』第二巻より引用。
4 同上より引用。
5 この書簡は、紹興魯迅紀念館に寄託されている。
6 孫伏園は1921～1924年の間、『晨報』副刊の編輯を担当していた。
7 括弧と疑問符は原文のまま。
8 周作人の妻。元日本籍。結婚前の名前は羽太信子で、結婚後に中国籍となり、周信子と改名した。
9 「件」は、周作人日記における原稿の略称。ここでは冰心が送り返してきた詩稿を指す。
10 「女大」は、北平女子文理学院の略称。
11 地山とは、許地山のこと。燕京大学教授で、周作人の助手。
12 周作人1931年日記より引用。現在、原本は周作人の子孫が所有。
13 同上より引用。
14 振鐸とは、鄭振鐸のこと。燕京大学教授。
15 陶亢徳は、文芸雑誌『宇宙風』の同人であり編集者。
16 周作人1939年日記より引用。現在、原本は周作人の子孫が所有。
17 「件」は、周作人日記における原稿の略称。ここでは冰心の『春水』手稿を指す。
18 注16同上より引用。
19 濱一衛の来信は原文日本語。中国語翻訳は顧偉良氏による。〔訳者補：中国語訳は割愛した。〕
20 中里見敬著「冰心手稿藏身日本九州大学 ──《春水》手稿、周作人、濱一衛及其他」(『中国現代

文学研究叢刊』2017年第 6 期）参照。

訳注 1　周吉宜先生および濱先生の御息女・藤本康子様のご厚意により、「濱一衛より周作人・周豊一宛書簡 8 通」「周豊一より濱一衛・濱ふみ宛書簡 7 通」がシンポジウム論文集に収録されている。

訳注 2　シンポジウム論文集第 3 冊所収の「濱一衛より周作人・周豊一宛書簡 8 通」に全文を掲載。潘世聖、中里見敬著「《春水》手稿後話及周作人、銭玄同、兪平伯詩作信札」（『中国現代文学研究叢刊』2018年第 4 期）も参照。

周 作 人 与 冰 心

——早期冰心女士与我祖父的交往——

周 吉 宜 著

中里见 敬 译

冰心女士手稿《春水》在九州大学图书馆被发现，引起人们对冰心女士与周作人先生关系的关注。本文力图通过对周作人先生日记以及冰心、郑振铎、鲁迅、孙伏园、陶亢德、吴文藻、滨一卫等诸女士、先生致周作人先生信件的汇集、整理和解读，呈现上世纪二三十年代周作人先生与冰心女士及《春水》的关系。文章分三个时期进行叙述：冰心女士到达美国威尔斯利女子学院留学之前（1922-1923）、留学期间（1923-1926）和留学之后（1926-1939）。中日两国人民友好的历史源远流长，《春水》手稿再一次勾连起两国文化交流和人民友好往来，值得称道。

本文所引史料，除影印版《周作人日记》外，均出自原件，其中部分内容为首次面世。

关键词：周作人、冰心、《春水》、日记、书信